

// 卷 頭 言 //

日本ライトハウス常務理事
關 宏之

「岩橋武夫」考

岩橋武夫の足跡は、①自身の失明の葛藤とキリストとの出会いによる【蘇り<1917(大6)年～1919(大8)年>】、②関西学院入学からエディンバラ大学・イギリス留学を果たし、帰国して関西学院で宗教哲学やミルトンを講じた【求道の時代<1919(大8)年4月～1927(昭3)年3月>】、③視覚障害福祉にかかわるようになりその接近を図った【著作・文筆の時代<1927(昭3)年4月～1933(昭8)年8月>】、④賀川豊彦らとともに「神の国運動」に参画した【伝道・学校教育の時代<1929(昭4)年4月～1950(昭25)年6月>】、⑤盲人団体と接触して盲人福祉への関わりを強めヘレン・ケラー女史を招致した【初期盲人福祉運動の時代<1933(昭8)年8月～1937(昭12)年8月>】、⑥第二次世界大戦前夜の混乱期において関西学院大学を辞し失明軍人問題に接近した【非常時の信行の時代<1937(昭12)年8月～1948(昭23)年8月>】、⑦戦後にヘレン・ケラー女史を招致し法制度や視覚障害者団体の結成・整備にかかわり、世界との連携を強めて「愛盲の使徒」と呼ばれるようになった最晩年の【愛盲リアリズムの時代<1949(昭24)年8月～1954(昭29)年10月>】の七つに時代性を区分することができよう¹。拙著「岩橋武夫—義務ゆえの道行」²はその通史である。しかし、その年月を明確に区分できるものではなく、現実には幾つもの活動が同時進行し、激動する社会情勢の中で振幅の激しい人生だったと思われる。

筆者は、1970年より日本ライトハウスに勤務したが、入社面接に呼ばれた日が、いみじくも、岩橋武夫夫人のきをさんのお亡くなりになった日だった。ひょんなことから1979(昭54)年の岩橋の没後25年を偲んで出版された「岩

¹ 關 宏之「第一章 わが国の障害者福祉と岩橋武夫の先駆的活動 第二節岩橋の足跡」で言及した分類、日本ライトハウス21世紀研究会編「わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー」教育出版、2002

² 關 宏之「盲先覚者シリーズNo.1 岩橋武夫—義務ゆえの道行」、日本盲人福祉研究会、1983

橋武夫先生を偲ぶ－愛盲の使途³なる冊子の編集を担当することになり、膨大な岩橋の著書に触れ、大阪の「盲界」の重鎮の指導を得て出版にこぎつけた。この世界に入って10年にも満たない若造が遭遇した好機ではあったが、正直なところ岩橋の深淵な世界は私ごときの理解を越えており、しばしば言葉を失った。そして、次の年の1980（昭55）年に、2代目理事長である岩橋英行による「青い鳥のうた－ヘレン・ケラーと日本」⁴の出版に際して、日本ライトハウスに眠っていたヘレン・ケラーとの交流を物語る数々の資料や逸話を発掘する機会を与えられ、1983（昭58）年に、岩橋の足跡を「岩橋武夫－義務ゆえの道行」として著す機会を得た。

当時39歳だった筆者は、断片的に語られる先達のことばや日本ライトハウスに残された膨大な資料を漁り、岩橋の一生をとにかくも77ページの物語に収めた。副題を「義務への道行」としたのは、カトリック教会における復活祭（四旬節）の主要な業に「十字架の道行」がある。教会には、イエス・キリストが、人類の罪を一身に引き受けてその代価として十字架を背負いながら死に向かい埋葬されるまでを描いた14場面のレリーフがある。その場面場面の一つ一つを前にしてロザリオを繰り返しながら黙想するのが「十字架の道行の祈り」である。岩橋の生涯を十字架を背負うキリストに重ねたからである。

岩橋の関西学院における教え子であり、我が先輩でもある日本点字図書館の故本間先生は、その巻頭言⁵で「今日、日本の盲人の福祉や教育はいわゆる先進国といわれる欧米諸国に比べて、ほとんど無に等しい、しかし、そうしたよき時代にめぐり会った私どもの幸せは、決して一朝一夕になったものではない。明治、大正、昭和の三代にわたっての多くの先輩たちの並ならぬ努力の結果なのである。その数多い先輩たちの中で、いま仮に、『最も優れた一人を』と言われるならば、私は躊躇なく岩橋武夫を挙げるであろう。その人物において、社会的活動の広さにおいて、また、残された業績においてである。」と述べ、

³ 社会福祉法人日本ライトハウス、「愛盲の使徒 岩橋武夫」、1979

⁴ 岩橋英行「青い鳥のうた－ヘレン・ケラーと日本」、日本放送出版協会、1980

⁵ 本間一夫「本書の刊行にあたって」關前掲「岩橋武夫」、Ⅲ～Ⅴ、1983

岩橋が『学者・文筆の人であった』『社会事業家・社会運動家であった』『優れた国際人であった』と述懐し、「愛盲の使途」と形容される岩橋を偲ばれている。概して岩橋に対してはこのような評価が多く、一般的な「岩橋観」だといえる。

筆者は本書の出版を見届けて1983年に日本ライトハウスを辞したが、2012年に30年も不義理をしていた筆者に橋本照夫理事長から復帰するようというお声掛けを頂いた。「老いの一徹」を標榜しながら心躍らせる日々を過ごしている。

さて、村島帰之⁶（よりゆき）による岩橋論がある。彼は岩橋が留学を終えて関西学院に職を得て以来の同僚で、賀川豊彦から受洗した毎日新聞の名物記者である。新聞紙上で「どん底物語」を連載して“どんちゃん”と呼ばれ、賀川とともに幾多の労働争議に参画した人物であるが、彼は、昭和9年の日本ライトハウスの前身である大阪盲人協会設立時の理事の一人でもある。その彼が「日本ライトハウス40年史」にしたためた岩橋物語が「愛盲事業の太閤ハン」である。岩橋武夫をよく知る人がしたためた本音ともジョークともとれる軽口の筆致で、日本ライトハウスの歴史的な社史によくぞと思わせる一文である。

さて、岩橋の盲人福祉事業に関して、第2次世界大戦下にとった国家主義(皇国史観)的な思想に偏った言動や著書を「戦争協力」だとして厳しく指弾するのが杉山(2003)である⁷。その論点は、①指導的立場にあった岩橋の言動が社会事業界や障害者福祉全体に大きな影響を与えたこと、②数々の先駆的な社会事業を生み出した大阪という在野精神に満ちた地にあるにも関わらず国家主義に追随したこと、③キリスト教徒(しかもクエーカー)という立場から戦争を否定的にとらえられたはずであり、岩橋の活動の出発点はイギリスであり、英文学への造詣も深くヘレン・ケラーとの交友など国際的立場を貫けば国粋主義の欺瞞を見破るのは容易であったこと、④『愛盲会館』『失明軍人会館』などさまざまな戦争協力をしているにもかかわらず、「愛盲の使途」などといういか

⁶ 村島帰之「愛盲事業の太閤ハン」、日本ライトハウス四十年史、Pp.276～279、日本ライトハウス、1962

⁷ 杉山博昭「キリスト教福祉実践の史的展開」、「岩橋武夫と盲人運動」、大学教育出版、Pp.300～316、2003、本資料は、同一の内容が「障害者問題における戦争責任一戦時下の岩橋武夫を通して」として、障害者問題研究、Vol.84、No.23、1996.2に掲載されている。

にも平和主義者であるかのような逆の評価がなされている、ということに尽きよう。室田⁸にも同様の指摘がある。

杉山(2003)は、岩橋武夫が執筆した各種の論文や各種の関連資料を丹念に調べ、岩橋武夫の罪状を挙げ、筆者による「ヘレンをアメリカに送った昭和12年8月以来、岩橋は、戦争という渦の中にあっても、その事態を盲人の地位向上のために利用してきた。とりわけ、海軍への飛行機の献上など、その最たるものである。人々は、岩橋の右傾化、軍事協力をなじったが、彼は、クエーカー教徒として、自らの魂を売るようなことはしていない。公になった論文や、新聞の談話の中には、当局から強い指弾を受けなかったのが不思議なほど言いたい放題である。時には翼賛体制の先頭に立ち、時には体制を容赦なく愚弄する岩橋はじっと耐えながら非常時の信行を通して世界平和を黙想していた。」⁹という文に対して、「あまりにも戦時下の岩橋の言動を都合よく解釈したものといわざるをえない」として容赦なく切り捨てる。「岩橋はクリスチャンであり、反戦主義を貫いた一生でなければならない」という筆者の思い込みが見透かされていたかも知れないが、その文章に至るまでの岩橋の切羽詰まった言動に関する文脈を無視して、一方的に断定されるのは強引すぎると言わざるを得ない。

ところが、新しい視座として、森田(2017)¹⁰は、岩橋武夫の初期の小説「動きゆく墓場」に着目して岩橋の精神性を探り、そこから盲人社会事業への道程を明らかにしようとする。筆者は、その昔この小説を読んで不覚にも冗漫な自伝的恋愛小説だと断じてしまった。しかし、森田(2017)は、この中に岩橋武夫の精神形成に関するキーワードを求め、「岩橋武夫の、盲人社会事業への道を振り返ってみる時、彼が、青年時代に重ねた苦悶と悲痛の日々における思索を見過ごしては、真の愛盲の根底にあった力を誤解して、表面的な理解に終

⁸ 室田保夫「岩橋武夫研究覚え書き－その歩みと業績を中心に」『関西学院大学人権研究』第一三号、関西学院大学人権教育研究室、2009 室田の最近の論文に次のものがある。「岩橋武夫とキリスト教：クエーカー派との関係を中心にした覚書」、「Human Welfare」第9巻第1号Pp.119～129、関西学院大学人間福祉学部・人間福祉研究科、2017.3

⁹ 關 宏之「前出」、Pp.56～57、1983

¹⁰ 森田昭二「第5章 岩橋武夫と盲人社会事業—小説「動きゆく墓場」からの出発」、細井 勇等編「福祉にとっての歴史 歴史にとって福祉—人物で見る福祉の思想」、Pp.95～115、ミネルヴァ書房、2017

わってしまうのではないだろうか。小説『動き行く墓場』から汲み取れる岩橋の心底には、後の盲人社会事業へと繋がる生きた心的体験が深化をつづけている。彼が孤独のエルサレムを求め始めたその地点こそ、後の盲人社会事業につながる精神史の出発点とっていいであろう。」と述べている。

『動き行く墓場』というフレームは、旧約聖書の「士師記」に登場する古代イスラエルの指導者「サムソン」が、妖艶な女性の魅力に負けた結果、敵方に囚われて両眼をえぐられ、労役を科せられながらも果たせない惨めな運命を嘆いて「動きゆく墓場、葬られたる身にしあれば、死にもせず朽ち果てもしない¹¹」として自分の過去を内省して苦闘し、敵の神殿を倒して自らも死んでイスラエルを救ったとされる物語をミルトンがギリシア悲劇の様式に倣って「嘆きのサムソン」（「闘士サムソン」）として創作した詩に由来する。

岩橋は、「動きゆく墓場」で自分をサムソンに模して次のようにいう¹²。

盲目者よ。お前は、人生の旅路を何處からきて何處へ行くのだ。お前はもう憂いの洗禮を受けて仕舞った。お前は、楽しみの影に、直ぐ悲しみを想像するぢやないか。お前の美の空想を、直ぐ現實の醜さに連れ戻るぢやないか。

盲目者よ。お前は悲しげに歩いて来た。そして何處へ行かうと言ふのだ。もう黄昏が来て居るではないか。あれを御覧。多くの旅人は宿を求めて、あの通り長い安息に入ろうとして居るではないか。お前は休息を勧めに出て居るあの提灯を持った人々が見えんのか。あれを御覧。フランスの偉人達の名が提灯に書かれて居るではないか。此方には露西亜の思想家達の名も。彼方には哲人達の名も。お前は詩篇の歌を忘れたのか。

盲目者よ。私はお前が可哀想になって来た。それではお前。孤褐な胸を震はせながら、此の道の果の闇を訪ね様と言ふんだね。さうしてありの儘に物を見ようと言ふんだね。此の闇には曙の接吻が永遠に来ないかも知れないよ。その時お前は悶と悲しみと疲勞を、何に依って慰めようとするのだ。

¹¹ 岩橋武夫「失樂園の詩的形而上学」、Pp.42、基督教思想叢書刊行会、1933

¹² 岩橋武夫「動き行く墓場」、Pp.417~418、警醒社書店版、1923

盲目者よ。お前はお前の生それ自身、お前の涙、お前の小さい芸術に依って、それを果さうとするのか。

岩橋はこの小説をしたためた後、妻きをとともにスコットランドのエディンバラ大学大学院で2年間を英文学と宗教哲学の研鑽に費やした¹³。大学の近くにあるエディンバラ城の門には、ラテン語で『私を攻撃する者は無事べからず』と敵すなわちイングランドへのあからさまな警告文が掲げられている。岩橋が学ぼうとしたミルトン(1608～1674)は、ピューリタン(清教徒)革命(1642～1649)の渦中であって、王権縮減を唱えたクロムウェルが率いる独立派に属し、国王処刑後はその外交秘書として革命を擁護しクロムウェルの軍事独裁を支えた。このころ失明するが、クロムウェル没後の王政復古の後に政界を引退し、創世記の1～3章を題材にした「人間の原罪」と神意を「失樂園」として執筆した。

杉山(2003)が岩橋武夫を戦争犯罪者として断罪する論文は、多くの方々の記憶にもあるに違いない。筆者も杉山論文への反論を試みようとして資料に当たってみたが、点字雑誌「黎明」や戦後出版されたクエーカーの新たな指針ともいふべき「創造的平和」、昭和9年にヘレン・ケラー女史と出会う契機となったアメリカ訪問に際して出版した「主イエス様のご生涯」の復刻版にも、自身が戦争に加担したことについて言及したものはない。そういう意味では、彼は、疑う余地もなく国家主義的であり、戦後は躊躇なくGHQやマッカーサー、新生なるアメリカからのクエーカー教徒やヘレン・ケラー女史との親交を臆面もなく再開する。村島(1962)のいう「振幅の広い、実行力に富んだ、毀誉褒貶相半ばする社会事業¹⁴」を推進するわけで、実にあっけらかんとしているのだ。

また、杉山(2003)が指摘する社会事業研究における「非常時即常時の信行¹⁵」における「戦争は悲劇の父であると共に又革新の母である」というフレー

¹³ 岩橋きを「菊と薊と灯台」(日本ライトハウス四十年史初出初出、1962)にエディンバラの日々が詳細に書かれている。

¹⁴ 村島婦之「前出」Pp.279、日本ライトハウス、1962

¹⁵ 岩橋武夫「非常時即常時の信行」社会事業研究、第25巻第9号、Pp.1～7、1937

ズは、「失明軍人に對する銃後的保護作業を完全圓滿に遂行せしめる動源であると共に是が非でも可急的に實現しなければならぬ。これ等失明軍人に對する援護事業が今迄看過され、遅れ勝ちであつた一般盲人に對する社會問題を全般的に解決する機運となり、その原動力となるといふ因果關係が兩者の間に介在することは深い留意に價する」という記述が続くもので、失明軍人対策の前に遅れている一般盲人¹⁶への施策を促す内容であり、しかも、ヘレン・ケラー女史に言及した個所は、戦時下におけるあるメタファーを言いたげでもある。

おわりに

戦時下の岩橋の言動だけを切り取って批判的に論じる杉山(2003)の「正義論」の前では、いかにも「戦争犯罪者」の末裔という烙印を押されているように居心地が悪く、物陰から監視されているような圧迫感から解放されそうにない。

盲人福祉の事業家として知られる以前の岩橋武夫について、森田(2017)¹⁷は、『動き行く墓場』から歷程を探ろうとする。著者は、この度の執筆に際して改めて「人間の原罪と赦し」の本質に迫ろうとする「失樂園の詩的形而上学」を手にとった時、岩橋武夫の死に際して盟友寿岳文章が朝日新聞紙上で、「彼には盲人福祉事業などよりも、ミルトンの研究をさせてやりたかった。日本の遅れた現状がそうさせたのだろうが、かわいそうで仕方がない」と述べたことを思い出した。しかし、そうしなかった。多分、それが、岩橋武夫の当為だったからであろう。

クリスチャンとは、高い道德価値を持ったもの静かな人、抗争を好まない人、奉仕の心に富んだ人、誰からも好かれるいい人間であること、というのが巷間の定説かも知れないが、人としての大切な要素ではあろうが、「キリストが人類の罪を背負って十字架につけられ、復活して全ての人に永遠の生命を与える」という教義を信じる者だということだろう。

私が受洗した時、ローマから帰ったばかりの若い神父さんと戦争孤児だった

¹⁶ 岩橋武夫「生活実態からみた盲人」『大阪社会事業研究』、22巻10号、Pp.92~100 大阪社会事業聯盟1934、ライトハウス・大阪盲人協会 年報第2号 1937、Pp.10

¹⁷ 森田昭二「前出」2017

彼を育て上げたブルガリア出身のシスターが、マタイによる福音書の一節、「地上に平和をもたらすためにわたしがきたと思うな。平和ではなく剣を投げ込むためにきたのだ」という文言をいつもとは違った面持ちで告げられた時のことを鮮明に覚えている。

年月は過去のいろいろを記念すべき日として刻む。日本ライトハウスにとって来年度は、1898（明43）年生まれの岩橋武夫の生誕120年であり¹⁸、ヘレン・ケラー女史¹⁹の没後50年という記念すべき年になる。

風変わりな「巻頭言」になったが、筆者は、本稿をもって「岩橋武夫論」のプロローグとし、改めて岩橋武夫に向き合うことにする。

¹⁸ 岩橋武夫は、1898（明43）年3月16日に生まれ、1954（昭29）年10月28日、58歳没。

¹⁹ ヘレン・ケラー女史、1880年6月27日生まれ、1968（昭43）年6月1日没。

日本ライトハウス養成部からのお知らせ

高屈折率スタンプルーペ

日本ライトハウス養成部では高屈折率スタンプルーペを開発しました。スタンプルーペでは最高の**2**倍の倍率を実現しました。

直径80mmと60mmの2種類。

80mm: 16,200円（税込）

60mm: 12,960円（税込）

お問い合わせは養成部まで

TEL:(06)6961-5521

Email: yoseibu@lighthouse.or.jp

みてみ

